

### 三 一心現じて法界悉く道なり

道は何れにありや。道は到る所にあり。「一華開けば天下皆春なり。一たび發心すれば法界悉く道なり」とは『禪林講式』の語。發心した眼から見れば天下の事一として道ならざるはなく、如何なるものからも道を見出し、教訓を發見することが出来る。一青洋畫家、三年間専心修行の後、大に得る處あり更に洋行修得を勧められ、一旦故郷に省し、上京して其恩人に語り言ふ「私は三年間東京で勉強しまして、餘程熟達した事を、今度歸郷して初めて感じました。三年前までは故郷の山水を寫生するに、何處の景色を書かうかと、所々方々を尋ね探して、辛うじて一つか二つを得ると云ふ有様でありましたのが、今度は到る處畫題とならざるはなく、何處を寫しても夫々趣があります」と。萬事は恚うあらねばならぬ。

大道は眼前に坦然たり、法界は悉く道なり。墻外底の小路は直に禁内に通ず。見よ。基督は野の百合と空の鳥に神の眞理を悟り。釋尊は曉の明星に無上菩提の正覺を感じ給ふたでないか。この世尊一枝の金波羅華を拈じ給ふ時、大迦葉獨り破顔微笑して、正法眼藏涅槃妙心の付囑を受けたでないか。朱利槃特は一本の箒によりて悟り、慧能は米を精げて悟り、靈雲は桃花の開くを見て悟り、香嚴は竹に當れる小石の音を聞いて悟り、元曉は死屍に溜る水を飲んで悟り、洞山は水を過り映れる己が影を見て悟り、寶積は行乞の際豚肉を賣るに逢うて廓然大悟したではないか。

或は又地を打ちて悟りしもあり、臂を斷ちて悟りしもあり、指を斬りて悟りしもあり、馬より落ちてさとりしもあり、手を拍ちて悟りしも、簾を卷き上げて悟りしも、風の音や燭の光や鳥の聲に悟りし者もあるではないか。其他に於て佐々木志津磨は牛涎の地に曳くを見て懸腕直筆の法を悟り、大雅堂

は草中の蛇の驚き逃ぐるを見て畫法を悟り、釋懷素は夏雲の閃き動くを見て草書三昧を悟り。法然上人は疊をおさへて念佛の尊さを語り、蓮如上人は廊下に落ちし紙片に佛恩の重きを感じ、峨山和尚は洗手鉢の水に靈の生命を説かれたではないか。天下何れの處にか如來に當面せざる處やある。

「酒飲めば何時か心も春めきて、借金取りも鶯の聲」。これは酒に一時の快を得たのであらう。が併し。「父が上戸で子が上戸、共に酒呑む振りをせず一夜悴が歸り來て、親父の前に手をつけば。父は見るより臂を張り、顔が三つ四つある様な、化物然たる子はもたぬ、貴様に家は譲られぬ。悴は聞いて嘲笑ひ、こんなぐるぐ廻る家、危険な家があるものか、欲しくはないと眼を据える」。こんなお悟では全く困るとはいへ、兎角恚うなりはすまいか。